

6. きゅうり

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	(銅水和剤) Zボルドー	散布	-	-	野菜類 (キハツを 除く)
	ドイツボルドーA	散布	-	-	野菜類
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫前日まで	4回以内	
P7	アリエッティ水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M4	オーソサイド水和剤80	散布	収穫前日まで	5回以内	
P2	オリゼメート粒剤	植穴土壌混和	定植時	1回	
27+M3	カーゼートPZ水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
24+M1	(カスガマイシン・銅) カスミンボルドー カップパーシン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
NC	カリグリーン	散布	収穫前日まで	-	野菜類(トマ ト、ミニトマトを 除く)
7	カンタスドライフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M1	キノンドー水和剤40	散布	収穫前日まで	5回以内	
-	キュービオZY-02	本剤の入っている容器 に水を加え5倍希釈液 とし、固形物を完全に溶 解した後、広口の容器に 全量を移し、最終的に 25倍希釈液とする。こ の希釈液に添付のカーボ ンナガムを加えてよく混ぜ ながら綿棒などを使っ て展開した一対の子葉 又は第1本葉の全面に 有傷接種する。	穂木の子葉完全展 開期又は接木苗の 第1本葉完全展開期	1回	
M1	キンセツ水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
10+1	ゲッター水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	チオファネートメチ ルを含む
M7+M3	サーガ水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M1	サンヨール	散布	収穫前日まで	4回以内	
M1+M5	シトラーノフロアブル	散布	収穫前日まで	5回以内	
NC+M1	ジーファイン水和剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類(な すを除く)
M3	(マンゼブ) ジマンダイセンフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
	ジマンダイセン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
	ペンコゼブフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
	ペンコゼブ水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
43+40	ジャストフィットフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
11	ストロビーフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
10+2	スミブレンド水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
12	セイビアーフロアブル20	散布	収穫前日まで	3回以内	
M7+17	ダイヤモンド	散布	収穫前日まで	3回以内	
M5	ダコニール1000	散布	収穫前日まで	12回以内	
3+M3	テーク水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	チオファネートメチ ルを含む
1	トップジンMペースト	塗布	発病初期	5回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
21+M5	ドーシャスフロアブル	散布	収穫前日まで	4回以内	
NC	ハーモメイト水溶剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
39	ハチハチ乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
40	フェスティバル水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
27+M5	ブリザード水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
9	フルピカフロアブル	散布	収穫前日まで	4回以内	
40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M7	ベルコートフロアブル	散布	収穫前日まで	7回以内	
M7	ベルコート水和剤	散布	収穫前日まで	7回以内	
1	ベンレート水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	ベノミルを含む
M7+19	ポリベリン水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
M10	モレスタン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M1	ヨネポン水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
21	ランマンフロアブル	散布	収穫前日まで	4回以内	
3	ルビゲン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
2	ロブラールくん煙剤	くん煙	収穫前日まで	4回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	

・殺菌剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	(銅水和剤) コサイド3000	散布	-	-	野菜類
11	スクレアフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
3+M3	テーク水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
M10	パルミノ	散布	収穫前日まで	3回以内	
17	ピクシオDF	散布	収穫前日まで	4回以内	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
9	フルピカくん煙剤	くん煙(通常10~15時間)	収穫前日まで	4回以内	
50	プロパティフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アーデント水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
3	アグロスリン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
3	アディオン乳剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	アドマイヤー水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	(施設栽培)
4	アドマイヤー1粒剤	植穴又は株元土壌混和	定植時	1回	
6	アフーム乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
16	アプロード水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
-	オレート液剤	散布	発生初期~収穫前日まで	-	野菜類(いちごを除く)
15	カスケード乳剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
5	スピノエース顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
1	ダイアジノン粒剤3	土壌混和	は種時又は植付時	2回以内	
4	ダントツ水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	ダントツ粒剤	植穴処理土壌混和	定植時	1回	
3	トレボンEW	散布	収穫前日まで	3回以内	
21	ハチハチ乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
21	ピラニカEW	散布	収穫前日まで	1回	
-	フーモン	散布	収穫前日まで	-	野菜類
-	ブリファード水和剤	散布	発生初期	-	野菜類(施設栽培 ただしいちごを除く)

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	ベストガード水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
4	ベストガード粒剤	植穴処理土壌混和	定植時	1回	
28	ベネビアOD	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	マブリック水和剤20	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
UN	モレスタン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
6	コロマイト乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
20	マイトコーネフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
UN	ポタニガードES	散布	発生初期	-	野菜類

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。ベノミルを含む剤を使用した場合には、チオファネートメチルを含む剤を使用しないこと。また、チオファネートメチルを含む剤を使用した場合には、ベノミルを含む剤を使用しないこと。ただし、塗布処理は除く。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 蚕毒・魚毒については、「56. 野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
つる割病 (F)	は種又は 定植前	1. 種子は、無病種子を用いる。 2. 無病の床土を用いる。 3. 抵抗性台木に接木する。 4. 土壌消毒及び床土消毒をする。薬剤で消毒する場合は登録のある薬剤を用いる。	1. 激発地では、5年以上休栽する。 2. 発病畑の茎葉、敷わらなどは焼却する。
	生育期間 5月下旬 以降	1. 発病株は、早期に抜き取る。	
疫 病 (立枯性疫病) (F)	は種又は 定植前	1. 無病の床土を用いる。 2. 土壌消毒及び床土消毒をする。薬剤で消毒する場合は登録のある薬剤を用いる。	1. 発生ほ場では、高畦栽培も有効である。
	生育期間 5月下旬 以降	1. ほ場の排水を図る。 2. 発病株は、早期に抜き取る。	
ホモプシス 根腐病 (F)	は種又は 定植前	1. 育苗土には無病の培養土を使用する。 2. 発生ほ場では、土壌消毒する(くん蒸剤又は熱水)。薬剤で消毒する場合は登録のある薬剤を用いる。	1. 発病株の根部表面には、黒点(疑似菌核)が観察される。 2. 着果期以降に発病することが多い。 3. 病原菌は、きゅうりの他、すいか、メロン、かぼちゃ等のウリ科植物全般を侵すので、ウリ科植物を連作しない。
	生育期間 5月下旬 ～7月上旬	1. 適正な草勢管理を行い、根の生育を促進する。 2. 発病株は根部を含めて早期に抜き取り、ほ場外に埋却する。	

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
菌核病 (F)	生育期間 4月上旬 ～7月上旬 9月中旬 ～11月下旬 (施設)	1. 被害部を除去し、ほ場外に埋却する。 2. ロブラール水和剤 1,000 倍液、スミブレンド水和剤、トップジンM水和剤の 1,500 倍液、ベンレート水和剤 2,000 倍液のいずれかを散布する。 3. 施設では、くん煙剤(ロブラール)処理を行うと施設内の湿度上昇を軽減できる(「54.くん煙法」を参照する)。 [参考農薬] 1. スクレアフロアブル、ピクシオDFの 2,000 倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤 3,000 倍液のいずれかを散布する。	1. ハウスで発生しやすい。 2. トップジンMはボルドー液と混用しない(薬効の低下、薬害)。 3. QoI 剤に関する注意事項「56.野菜類の総括注意」参照。 4. スミブレンドは、アブラナ科作物、ばら、シクラメンに薬害を生ずるのでかからないようにする。 5. ベンレートを使用した場合には、チオファネートメチルを含む剤(トップジンM及びゲッター等)を使用しないこと。トップジンM及びゲッターを使用した場合には、ベノミルを含む剤(ベンレート等)を使用しないこと。
灰色かび病 (F)	生育期間 4月上旬 ～7月上旬 9月中旬 ～11月下旬 (施設)	1. セイビアーフロアブル 20 の 1,000 倍液、ロブラール水和剤 1,000～1,500 倍液、スミブレンド水和剤、トップジンM水和剤の 1,500 倍液、ベンレート水和剤 2,000 倍液、フルピカフロアブル 3,000 倍液のいずれかを散布する。 2. 施設では、ロブラールくん煙剤処理を行うと施設内の湿度上昇を軽減できる(54.くん煙法を参照する)。 [参考農薬] 1. 施設では、フルピカくん煙剤処理を行う(「54.くん煙法」を参照する)。	1. ハウスで発生しやすい。 2. 通風を図り、湿度を下げる。 3. ほ場内の被害茎葉や残渣は伝染源となるので、ほ場衛生に努める。 4. トップジンM、ベンレート、ロブラールに対する耐性菌がすでに出現しているので、効果の低い場合は使用しない。 5. 同一系統の薬剤は連用しないで、他系統の薬剤とローテーション散布する。 6. セイビアーはレタスにかからないようにする(薬害)。 7. フルピカは、おうとうにかからないようにする(薬害)。 8. スミブレンドは、アブラナ科作物、ばら、シクラメンに薬害を生ずるのでかからないようにする。 9. ベンレートを使用した場合には、チオファネートメチルを含む剤(トップジンM及びゲッター等)を使用しないこと。トップジンM及びゲッターを使用した場合には、ベノミルを含む剤(ベンレート等)を使用しないこと。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
べ と 病 (F)	生育期間 4月下旬 ～9月下旬	<ol style="list-style-type: none"> 1. 発病前の予防は、Zボルドー、サンヨール、ドイツボルドーA、マンゼブ剤（ジマンダイセンフロアブル、ペンコゼブフロアブル）、ヨネポン水和剤の500倍液、テーク水和剤800倍液、キノンドー水和剤40、サーガ水和剤、ダコニール1000、ドーシャスフロアブル、プロポーズ顆粒水和剤の1,000倍液、シトラーノフロアブル1,000～1,200倍液、アミスター20フロアブル、フェスティバル水和剤、ランマンフロアブルの2,000倍液のいずれかを散布する。 2. 初発以降は、アリエッティ水和剤600倍液、カーゼートPZ水和剤1,000倍液、ジャストフィットフロアブル5,000倍液のいずれかを散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 降雨の多い場合は散布間隔を短縮する。 2. 敷わらやマルチを行い、雨滴のはね上りを防ぐ。 3. 下葉で発病が著しいものは、摘葉する。 4. テークは銅剤との混用、近接散布を避け、夏秋作きゅうりでは連続散布しない。 5. テークは、目に刺激性があるので目に入らぬよう注意する。 6. サーガは幼果期のメロン、ばらにかからないようにする（薬害）。 7. カーゼートPZ、サーガは、ボルドー液とは混用しない（薬効の低下）。 8. Q o I 剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。 9. ジャストフィット、フェスティバル、プロポーズはカルボン酸アミド系剤である。予防的に使用し、他系統の薬剤とローテーション散布する。
褐 斑 病 (F)	生育期間 4月下旬 ～収穫期	<ol style="list-style-type: none"> 1. オーツサイド水和剤80、マンゼブ（ジマンダイセン、ペンコゼブ）水和剤の600倍液、テーク水和剤800倍液、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000、プロポーズ顆粒水和剤の1000倍液、カンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、スミブレンド水和剤、ブリザード水和剤の1,500倍液、アミスター20フロアブル、フルピカフロアブル、ベルコート水和剤、ベルコートフロアブルの2,000倍液のいずれかを散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 収穫が始まり、株が弱ると発病しやすくなる。 2. スミブレンドは、アブラナ科作物、ばら、シクラメンに薬害を生ずるのでかからないようにする。 3. Q o I 剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。 4. ベンゾイミダゾール系剤、ジェトフェンカルブ・プロシミドン剤及びボスカリド剤に対する耐性菌発生地域では、カンタス、ゲッター、スミブレンドの使用は控える。 5. ゲッターを使用した場合には、ベノミルを含む剤（ベンレート等）を使用しないこと。
黒 星 病 (F)	生育期間 5月下旬 ～9月下旬	<ol style="list-style-type: none"> 1. 発病初期に、罹病部を除去する。 2. 支柱等資材を消毒する。ケミクロンG 1,000倍液に10分間浸漬するか、500倍液をジョロで散布する。 	
炭 疽 病 (F)	生育期間 6月から 収穫期まで	<ol style="list-style-type: none"> 1. 多発葉は除去する。 2. キノンドー水和剤40の800倍液、又はベルコートフロアブル2,000倍液を散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高温時の散布は、薬害が発生することもあるので注意する。
つ る 枯 病 (F)	6月上旬 ～7月上旬	<ol style="list-style-type: none"> 1. 発病初期に患部を削り、トップジンMペーストを塗布する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高温多湿になると多発するので、通風を図る。 2. トップジンMを使用した場合には、ベノミルを含む剤（ベンレート等）を使用しないこと。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
うどんこ病 (F)	7月下旬 ～10月中旬	<p>1. 予防～発生初期は、サーガ水和剤、ダコニール1000、ハチハチ乳剤の1,000倍液、ダイマジン、トップジンM水和剤の1,500倍液、アミスター20フロアブル、ポリベリン水和剤の2,000倍液、ベルコート水和剤2,000～4,000倍液、ストロビーフロアブル3,000倍液のいずれかを散布する。</p> <p>2. 発病後は、(1)～(3)の薬剤をローテーション使用する。</p> <p>(1)ブリザード水和剤1,500倍液、フルピカフロアブル、モレスタン水和剤の3,000倍液。</p> <p>(2)DMI剤：トリフミン水和剤4,000倍液、ルビゲン水和剤10,000倍液。</p> <p>(3)カリグリーン、ハーモメイト水溶剤の800～1,000倍液、ジーファイン水和剤1,000倍液。</p> <p>[参考農薬]</p> <p>1. テーク水和剤800倍液、パルミノ2,000倍液、プロパティフロアブル4,000倍液のいずれかを散布する。</p>	<p>1. トップジンMは連用を避け、ボルドー液と混用しない。</p> <p>2. トップジンMを使用した場合には、ベノミルを含む剤（ベンレート等）を使用しないこと。</p> <p>3. トリフミンは、きゅうりの幼苗に、高濃度液を散布すると薬害を生ずることがあるので、基準濃度を厳守する。</p> <p>4. DMI剤は連用しない（耐性菌の出現回避）。</p> <p>5. カリグリーン、ハーモメイトは残効性を有しないので、直接病斑部分に十分かかるよう散布する。散布間隔は5日位とし、2～3回連続散布する。</p> <p>6. ベルコートは、ばらに対して薬害を生ずるので、かからないようにする。</p> <p>7. ハチハチは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</p> <p>8. フルピカはおうとうにかからないようにする（薬害）。</p> <p>9. サーガは幼果期のメロン、ばらにかからないようにする（薬害）。</p> <p>10. QoI剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。</p> <p>11. ジーファインは、ジチオカーバメート系殺菌剤（マンゼブ等）との混用、近接散布を避ける（薬効の低下、薬害）。また、過度の連用は銅の薬害が出やすいので注意する。</p> <p>12. ダイマジンは幼果期のメロン、ばらにはかからないようにする（薬害）。</p> <p>13. ハチハチは、殺虫剤として使用する場合がありますので、本剤の総使用回数を遵守する。</p> <p>14. テークは目に刺激性があるので、目に入らぬよう注意する。</p> <p>15. パルミノはモレスタンと同一成分であるので、使用回数に注意する。</p>
斑点細菌病 (B)	定植前	<p>1. 定植時に、オリゼメート粒剤を株当たり5g植穴処理土壌混和する。</p>	<p>1. 発病後は防除困難のため、予防防除に努める。</p> <p>2. オリゼメートは、植穴の土壌と十分混和したのちに定植する。</p> <p>3. 換気に努め、ハウス内の高温、過湿を避ける。</p> <p>4. ハウス内での薬剤散布は、できるだけ気温の低い午前中に行い、新葉、葉裏へていねいに散布する。</p> <p>5. 被害の甚だしい葉、果実は除去する。</p>
	生育期間 4月下旬 ～9月中旬	<p>1. Zボルドー、キンセツ水和剤、ドイツボルドーAの500倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー、銅パーシオン水和剤）1,000倍液のいずれかを予防散布する。</p> <p>[参考農薬]</p> <p>1. コサイド3000の2,000倍液を散布する。</p>	

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
緑斑モザイク病 (CGMMV) (V)	生育期間	1. 必ず健全種子を用いる。 2. 発病株は、直ちに抜き取り、ほ場外に埋却する。 3. 残果、残渣の整理を行う。	1. 病原ウイルスは、種子伝染、接触伝染、土壌伝染する。 2. 宿主範囲は、ウリ科植物に限られるので、他科植物と輪作する。 3. 被害残渣がほ場に残っていると発生が増加する。 4. 接触、刃物により容易に汁液伝染するので、摘心、摘果作業時は注意する。
モザイク病 (CMV、WMV、ZYMV) (V)	育苗期 (穂木の子葉完全展開または接木苗の第1本葉完全展開期)	1. ZYMVの感染によるモザイク病、及び萎凋症防除に、キュービオZY-02の25倍希釈液を苗に接種する。 (使用方法) 希釈方法：キュービオZY-02の入っている容器に水を加え5倍希釈液とし、固形物を完全に溶解した後、広口の容器へ全量を移し、最終的に25倍希釈液とする。 接種方法：作製した希釈液に添付のカーボランダムを加え、よく混ぜながら綿棒などを使って展開した一対の子葉、又は第1本葉の全面に有傷接種する。	1. キュービオZY-02は、ZYMV弱毒株2002株の凍結乾燥製剤であり、ZYMVによるキュウリモザイク病および萎凋症の予防にのみ効果があり、CMVやWMVに対する防除効果は期待できない。 2. キュービオZY-02接種後の植物体に直射日光が当たる条件下では感染率が低下し、低感染率の場合は防除効果が十分に得られないので注意する。 3. 収量には悪影響を及ぼさないものの、キュービオZY-02接種による一過性の軽微な退緑斑の発生(葉害)事例がある。 4. キュービオZY-02接種株でネコブセンチュウ被害が助長された事例がある。きゅうり根部にネコブセンチュウの被害が認められるほ場で利用する場合は、ネコブセンチュウの防除を徹底する。 5. キュービオZY-02の利用に当たっては、使用量、使用時期、使用方法を誤らないようにする。特に初めて使用する場合はメーカーのリーフレットをよく参照するとともに、試験場又は専門技術員と相談するのが望ましい。 6. キュービオZY-02接種苗が販売されているので、それを利用するとよい。
モザイク病 (CMV、WMV、ZYMV) (V)	定植時 及び 生育期間	1. モザイク病の媒介虫はアブラムシ類であるので、アブラムシ類の項を参照し、耕種的防除を行うと共に殺虫剤による防除を行う。 2. ほ場内外の雑草などのウイルス伝染源の除去、被害株の早期発見・早期対処・適正処分など行う。 3. 病原ウイルスは、いずれも汁液伝染する恐れがあるので、畦ごとにハサミを替えるなど汚染ハサミを用いた管理作業等で健全株に蔓延させないように注意する。	1. CMV、ZYMV感染の有無はイムノクロマト法により簡易診断できる。 2. 長野県内から検出されるウイルスは、CMV、ZYMV、WMVの3種で、単独もしくは重複感染しており、主な病徴は葉のモザイク、果実の奇形及び株全体の急性萎凋である。 3. ZYMVとその他ウイルスとの重複感染株は、果実の奇形や株全体が急性萎凋するなど激しい病徴を呈することが多い。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
アブラムシ類	定 植 時	1. シルバーストライプフィルムをマルチする。 2. 施設栽培では開口部を防虫ネット(0.8mm目合い)で被覆する。 3. ダントツ粒剤またはベストガード粒剤を株当たり1g植穴土壌混和する。	1. 黄色ネットはアブラムシの飛来を多くするので、使用を避ける。 2. マブリックは、オンシツコナジラミも併殺できる。 3. アーデント、マブリックは蚕毒及び魚毒に、アドマイヤー、ダントツ、ベネビアは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 4. アドマイヤー、ダントツはミツバチ、マルハナバチへの影響に注意する。 5. ベネビアに関する注意事項 (1) 展着剤を加用すると薬害が生じる場合があるため、展着剤は加用しない。 (2) アルカリ性の農薬や肥料との混用はさける。 (3) 薬害が生じるおそれがあるので、アミスター(QoI剤)の成分を含む農薬、銅剤と混用しない。また、アミスター(QoI剤)の成分を含む農薬を散布した場合には、2週間以上間隔を空けて本剤を使用する。 6. オレートは昆虫の気門をふさぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるよう寄生部を中心に十分量を散布する。さらに多発時は5～7日程度の間隔で連続散布する。 7. アドマイヤーは施設栽培に限る。
	生 育 期 間	1. アーデント水和剤、ベストガード水溶剤の1,000倍液、アドマイヤー水和剤、ベネビアODの2,000倍液、ダントツ水溶剤、マブリック水和剤20の4,000倍液のいずれかを散布する。 2. オレート液剤100倍液を散布する。	
ハダニ類	生 育 期 間	1. コテツフロアブル、ピラニカEWの2,000倍液、フーモンの1,000倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. コロマイト乳剤、マイトコーネフロアブルの1,000倍液のいずれかを散布する。	1. かけむらのないように十分量散布する。 2. フーモンは直接害虫にかかると効果が発揮しないため、葉の表裏にムラなく散布する。 3. コロマイトは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 4. コロマイトは高温、乾燥時の散布は薬害のおそれがあるので避けること。また、アルキルエーテル系の展着剤を加用すると薬害を助長することがあるので使用しない。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
オンシツ コナジラミ	5月～9月	<ol style="list-style-type: none"> 施設栽培では開口部を防虫ネット(0.4mm目合い)で被覆する。 黄色粘着トラップを設置して成虫の発生消長を把握する。 アグロスリン水和剤、アブロード水和剤、トレボンEWの1,000倍液、アディオン乳剤、モレスタン水和剤の2,000倍液のいずれかを散布する。 プリファード水和剤1,000倍液を散布する。 <p>[参考農薬]</p> <ol style="list-style-type: none"> ボタニガードESの1,000倍液を散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> モレスタンは殺卵効果が高いので、卵の多い時期に散布する。なお、高温時に温室内で薬害の出ることがある。 オンシツコナジラミは、黄化病ウイルスを媒介する。 アグロスリンとアディオンは、同系統であるので連用、多用しない。 アグロスリン、アディオン、トレボンは蚕毒及び魚毒に、ボタニガードは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 ボタニガードは5回以上の連続散布により、薬害が発生することがあるので注意する。 プリファード・ボタニガードは微生物農薬であり使用方法と注意事項については、「1 野菜類」のコナジラミ類の項を参照。 アブロードは幼虫に対してのみの登録であるため注意する。
アザミウマ類	定 植 時	<ol style="list-style-type: none"> アドマイヤー1粒剤を株当たり1～2g植穴処理土壌混和する。 	<ol style="list-style-type: none"> アドマイヤー、モスピラン、ハチハチは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 薬剤抵抗性発達を回避するため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。
	生 育 期 間	<ol style="list-style-type: none"> 施設栽培では、開口部を防虫ネット(0.4mm目合い)で被覆する。 ハチハチ乳剤1,000倍液、又はモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液を散布する。 	
ミカンキイロ アザミウマ	生 育 期 間	<ol style="list-style-type: none"> アーデント水和剤1,000倍液、又はコテツフロアブル2,000倍液を散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> アーデントは蚕毒及び魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
ミナミキイロ アザミウマ	生 育 期 間	<ol style="list-style-type: none"> アグロスリン水和剤1,000倍液を散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> アグロスリンは蚕毒及び魚毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
ウリノメイガ	生 育 期 間	<ol style="list-style-type: none"> アフーム乳剤2,000倍液を散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> アフームは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
トマト ハモグリバエ	生 育 期 間	<ol style="list-style-type: none"> 施設栽培では、開口部を防虫ネット(0.6mm目合い)で被覆する。 アフーム乳剤、カスケード乳剤の2,000倍液、スピノエース顆粒水和剤の5,000倍液のいずれかを散布する。 	<ol style="list-style-type: none"> アフーム、カスケード、スピノエースは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 施設内に、いんげん等本種が好む植物があると発生源になるので同時に栽培しない。 アフーム、スピノエースはハモグリバエ類での登録である。
ネコブ センチュウ	定 植 前	<ol style="list-style-type: none"> 土壌線虫の項を参照する。 	
タネバエ	は 種 時	<ol style="list-style-type: none"> ダイアジノン粒剤3を10a当り5～8kg土壌混和する。 	
ウリハムシ 幼虫	植 付 時	<ol style="list-style-type: none"> ダイアジノン粒剤3を10a当り6kg土壌混和する。 	